

御沓脱跡(おくつぬぎあと)

8月12日の午前中に祭事が行われ、小学生の少女による乙女の舞が奉納されます。この祭事は、昭和26年に焼津市制施行を記念して始まったものです。

日本武尊(やまとたけるのみこと)が東征の際にこの場所で沓を脱ぎ休憩したと伝わり、老女が「小麦飯(こむぎのいい)」で日本武尊をもてなしたといひます。この場所には、老女の子孫である下村家が明治半ばまで住んでいました。昔は、北御旅所(きたのおたびしょ)で献上される神饌(しんせん)は、すべて下村家で作られていたそうです。

以下、13日の神事になります。

南の御旅所(みなみのおたびしょ)

「南のオヤスミサン」とも呼ばれます。焼津神社を出発して最初に入る御旅所です。昭和40年頃までは、神輿(みこし)がこの南の御旅所前の浜から海に入っていたといひます。

北御旅所(きたのおたびしょ)

「北のオヤスミサン」とも呼ばれます。この場所は、日本武尊(やまとたけるのみこと)が海から上陸した場所と伝わります。

ここでは、御供奉(おんくささげ)役によって「小麦飯(こむぎのいい)」「牛舌餅(うしのしたもち)」「楡形餅(くしがたもち)」といった特殊神饌(とくしゅしんせん)が献上されます。「小麦飯」は、御沓脱跡(おくつぬぎあと)での故事に由来します。

魚市場御旅所(うおいちばおたびしょ)

漁業関係者からの声で作られた御旅所で、戦後に魚市場(旧港)ができてから神輿が渡御(とぎょ)するようになりました。新港に新しい魚市場ができてからは、そちらに渡御するようになりました。

焼津御旅所(やいづおたびしょ)

ここでは、2つの神事が行われます。まず、御神子(いちっこ)役が乗馬のまま御旅所の前を2度半駆け抜けます。これは、日本武尊の御心を鎮めるためだといひます。

次に流鏝馬(やぶさめ)役が乗馬のまま、弓矢を高々と掲げながら御旅所の前を3度半駆け抜けます。

昔は的に向かって矢を放っていましたが、安全面から平成20年より中止しています。

この流鏝馬役は、現在は少年の役ですが、かつては「カネタカ」と呼ばれる家の者が代々つとめる大人の役でした。

この神事が終わると神輿の還御となり例大祭は終了となります。

参考文献

『焼津市史民俗編』焼津市発行

『焼津市民俗調査報告書 浜通りの民俗』焼津市発行

『古典と民俗学叢書 I 焼津の荒祭り』古典と民俗学の会編

『日本武尊論 焼津神社誌』桜井満著

「焼津神社とおまつり 心形静動～次代に受継がれるもの～」新村清重